

天誅組

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

天誅組(てんちゅうぐみ)は、幕末に公卿中山忠光を主将に志士達で構成された尊皇攘夷派の武装集団。大和国で挙兵するが、幕府軍の追討を受けて壊滅した(天誅組の変)。**天忠組**とも。

概要

文久3年(1863年)8月13日、孝明天皇の神武天皇陵参拝、攘夷親征の詔勅が発せられる(大和行幸)。土佐脱藩浪士の吉村寅太郎ら攘夷派浪士は大和行幸の先鋒となるべく、攘夷派公卿の前侍従中山忠光を主将に迎えて京を出発した。これに従軍した半田門吉の『大和日記』によると結成時の同志は38人で、そのうち18人が土佐脱藩浪士、8人が久留米脱藩浪士であった。このほか淡路島の勤皇家で大地主であった古東領左衛門は先祖代々の全財産を処分し、天誅組の軍資金として供出した。彼らがいつの時点で**天誅組**を称したかは詳らかではない。

8月17日、幕府天領の大和国五条代官所を襲撃。代官鈴木正信(源内)の首を刎ね、代官所に火を放って挙兵した^[1]。桜井寺に本陣を置き五条を天朝直轄地とする旨を宣言し、「**御政府**」あるいは「**総裁所**」を称した。**五条御政府**と呼ばれる。

挙兵の直後の8月18日、八月十八日の政変が起こり、大和行幸は中止となり京の攘夷派は失脚してしまう。挙兵の大義名分を失った天誅組は「暴徒」とされ追討を受ける身となった。天誅組は天の辻の要害に本陣を移し、御政府の名で武器兵糧を徴発し、吉村寅太郎は五条の医師乾十郎とともに十津川郷(奈良県吉野郡十津川村)に入り、反乱に加入を説得。その結果、野崎主計ら十津川郷士960人を募兵して兵力は膨れ上がったが、烏合の衆に過ぎずその武装は貧弱なものだった。十津川の人々も半ば脅迫されて急きょかき集められた。しかも休息も食事もなく戦闘に参加せられるなど、戦意に乏しかった。

あまりの酷さに玉堀為之進や植田主殿ら十津川郷士は指揮官に抗議したが、中山らに憎まれ天辻峠で斬首されている。

天誅組は高取城を攻撃するが、少数の高取藩兵の銃砲撃を受けて混乱して敗走。この時点で三河刈谷藩から参加していた伊藤三弥のように早々に脱走するものもあった(後に伊藤は松本奎堂の密書を岩倉具視に届けたと弁明しているが、岩倉具視と松本奎堂の関係を考えればあり得ないことである。伊藤三弥と同郷の碩学森銃三は「脱走した三弥の言い訳に過ぎない」と断じている)。この伊藤三弥の脱走は天誅組の脆弱さを示す例としてしばしば引用される。

幕府は諸藩に命じて大軍を動員をして天誅組討伐を開始する。天誅組は激しく抵抗するが、主将の中山忠光の指揮能力が乏しいこともあり敗退を繰り返し、しだいに追い詰められる。朝廷から天誅組を逆賊とする令旨が京都在住の十津川郷士前田雅楽に下され、急遽現地に赴いた前田は十津川郷士を説得。ここに主力の十津川勢が9月15日に離反。郷士代表の野崎は責を負い自害する。9月19日、忠光は天誅組の解散を命じる。残党は伊勢方面へ脱出を図るが、鷲家口(奈良県東吉野村)で幕府軍に捕捉され壊滅した。



天誅組志士之墓、靈山護国神社、京都市左京区



天辻の本陣跡(五條市)

志士たちの霊は京都霊山護国神社に祀られている。

編成

五条代官所襲撃後の8月18日に桜井寺で職制と軍制を定めている。

- 主将：中山忠光
- 総裁：藤本鉄石、吉村寅太郎、松本奎堂
- 御用人：池内蔵太
- 監察：吉田重蔵、那須信吾、酒井伝次郎
- 銀奉行：磯崎寛
- 砲隊伍長：安岡直行
- 参謀兼記録方：伴林光平
- 小荷駄奉行：水郡善之祐



天誅組終焉の地碑（東吉野村）

槍隊、鉄砲隊が編成された。総勢は1000人余。脱藩浪士が指揮し、隊士の主体は十津川郷士であった。

浪士は土佐藩、久留米藩出身者が中心であった。身分は郷士や庄屋、神官、僧侶。年齢は13歳から46歳までいて、20歳代の若者が多い。主将の中山忠光は19歳であった。

装備は狭山藩など、河内地方の各藩から徴発したゲベール銃（蘭：Geweer、小銃）、槍、弓矢、刀などで極めて貧弱だったと思われる。また、松の木で木製の大砲を十数門製作するが、上手く発火せず全く役に立たなかった。

脚注

1. ^ 海音寺潮五郎と司馬遼太郎は対談でこの行動に触れ、海音寺「天忠組の行動は今の全学連みたいなおもので、なんでもかんでも反省しろ反省しろというんだから」、司馬「幕末維新の諸事件の中で、天忠組がいちばんおもしろい感じがする」と評している。海音寺・司馬『新装版 日本歴史を点検する』講談社文庫 ISBN 978-4062759168、35p

参考文献

- 舟久保藍『大和義挙再考一』（2003年5月）
- 舟久保藍『大和義挙再考二』（2003年5月）

関連作品

- 中里介山『大菩薩峠』（春秋社、1921年）
- 三上於菟吉『天誅組』（改造社『維新歴史小説全集・第三巻』所収、1934年）
- 菊池寛『天誅組罷通る』（大日本雄辯會講談社、1941年）
- 司馬遼太郎『おお、大砲』（新潮文庫『人斬り以蔵』所収、1969年）
- 司馬遼太郎『五条陣屋』（講談社文庫『アームストロング砲』所収、1988年）
- 小中陽太郎『天誅組始末記』（大和書房、1970年）
- 大岡昇平『天誅組』（講談社、1974年）
- 仲町六絵『夜明けを知らずに―天誅組余話―』（アスキー・メディアワークス、2012年）

関連項目

- 天誅組の変

- Sa・Ga2 秘宝伝説-同名の組織が登場するが、こちらは旗本の次男坊達が結成した組織となっている。

外部リンク

- 天誅組 (<http://www.tenchugumi.jp/>)

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=天誅組&oldid=61998514>」から取得

カテゴリ: 幕末諸隊 | 大和国

- 最終更新 2016年11月20日 (日) 01:34 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。